

I と you が関係する表現について

前原 由幸

1. はじめに

言葉はある状況を表現するのに用いられるが、表現方法には話し手のその状況に対する姿勢が映し出される。例えば、「一郎が次郎を追い越した」「次郎が一郎に追い越された」という二つの文では、表現している状況は同じであるが、表現方法は異なる。一郎の話として状況を説明するなら前者が、次郎の話として状況を説明するなら後者が用いられる。話し手が状況をどのようにとらえているかが表現にあらわれる。

言葉の話し手は一人称で、聞き手は二人称で表現される。英語の人称代名詞では、I と you である。本稿では、I と you が関わる表現を取り上げ、英語の I、you の使い方には、話し手の状況のとらえ方が影響されることを示していく。また、話し手の状況のとらえ方には、日本語と英語の間には違いが見られることも見ていく。話し手の状況のとらえ方は、円滑な言語運用の背景になっているので、違いを理解することは、外国語として英語を修得する際に重要であろう。

2. 一人称、二人称の代名詞

代名詞は、先行文脈の中に見られる名詞表現を指示することが多い。しかしながら、代名詞の中には、言葉以外の事物を指し示す働きをする代名詞もある。指示代名詞は、指で指し示すように「これ」「あれ」というように言葉の中だけでなく、現実世界の事物を指示するのに使うことができる。人称代名詞の中でも、一人称の I と二人称の you は、それぞれ、話し手と聞き手を指す代名詞である。話し手や聞き手を言語表現の中に持ち込むためには、I と you が必要である。

日本語に「私」、「あなた」という代名詞はあるが、多くの場合、一人称と二人称は使用されない。表現される場合には、対比的な意味合いが込められることが多い。また、I と you のように一つの特定の代名詞が話し手、聞き手を指

示すわけではない。状況に応じて、「私」「ぼく」「自分」、「あなた」「君」「お前」などが使い分けられる。この点では、日本語と英語の一人称、二人称の使い方が異なる。他にも用法の違いがみられる。用法の違いには、日本語と英語の違いが反映されている。

2.1 二種類の“I”

同じ状況を表現しても、日本語ではふつうは一人称を用いて表現されない状況を英語では一人称を用いて表現されることがある。例をあげる。

(1) a. Why am I here?

b. What am I doing here?

これらの文は話し手が呼び出された人、聞き手が呼び出した人という関係では、呼び出した理由を問うために使うことができる。話し手が自分で自分に問いかけるような状況の発話であるならば、自問自答する問いかけであり、日本語でも英語でも同様であるが、聞き手が呼び出した相手である場合には、英語では「なぜ呼んだのですか」という趣旨の質問で用いられることがある。

英語で、聞き手に対するこのような質問になるということは、話し手と主語の I は完全に一致しているわけではないことになる。話し手は I を三人称的に用いている。話し手が状況の当事者として関与しているのではなく、客観的な立場から I の状況を聞き手に対して質問していることになる。日本語では、この場合には「なぜ呼んだのですか」などと問いかけをする。一人称を主語に用いた表現方法は通常は用いられない。英語の一人称の代名詞は日本語の一人称の代名詞とは異なる用法を持っていることがこの例からわかる。どこからこのような違いが生まれるであろうか。

池上(2006a)では、話し手の状況のとらえ方を<客観的把握>と<主観的把握>に分けて、このような違いが説明されている。

(2) Where am I?

(池上 2006a: 163)

(2)は、<客観的把握>の例としてあげられている。知らない場所に来てしまって、「ここはどこですか」とたずねる場合に使うことができる表現である。池上(2006a)によると、<客観的把握>では、状況を把握する<認知の主体>(cognizing subject)としての話し手は言語化の対象となる状況の外に自らの身を置くという立場で状況を把握している。(2)に相当する日本語の「ここはどこでしょうか」という表現では、話し手の状況把握の方法は異なる。この場合、認知の主体としての話者は言語化の対象としている状況の内に自らの身を置くという立場で、状況を把握しているのである。話し手は自らが直接体験するという立場でとらえている。池上(2006a)はこれを<主観的把握>と呼んでいる。この分類に従えば、英語の一人称の I は、必ずしも日本語の一人称とは同じ働きをしているわけではないということがわかる。<客観的把握>における、状況を外から客観的に見るという働きは、日本語の一人称にはない。<主観的把握>の場合の一人称の働きをするが、通常は日本語の一人称主語の代名詞は表現されない。対比的な意味合いを表す場合に一人称の代名詞が用いられることが多い。話し手が一人称の代名詞の形で主語として表現されないというのは、日本語の<主観的把握>の特徴と言えよう。池上(2006a)が主張する二つの状況の把握法が(1)(2)の例にみられる英語と日本語の違いを説明できる。

別の例でも考えてみよう。誰も部屋にいないことを報告するとき、次のような文を用いることができる。

(3) Nobody is here except me.

(池上 2006a: 163)

この例は外から自分を見るかのような表現である。日本語では、「誰もいません」で済まし、「自分以外」を加える必要は通常はない。一方、英語では、except me を加えた表現も用いられる。

同じ状況を表現する場合でも、状況のとらえ方によって、表現方法に違いが出るのがわかる。英語の一人称が<客観的把握>に基づく表現で用いられるが、日本語の場合はそうではない。日本語では、通常は一人称が主語の場合には<主観的把握>に基づく表現になる。<主観的把握>においては、話し手は状況の関与者と化して、そこが言語表現の原点となる。原点がどこなのかがわかる

ので、一人称の主語を表現しないで済むのであろう¹⁾。

<客観的把握>による表現が可能な英語では、話し手は状況把握の主体として、把握の対象となる状況を外から眺めているかのように表現できる。(1)(2)(3)の例では、話し手は、外から主語の I に視点を向けて、I について表現していることになるので、話し手と I とが別人であるかのようなのである。<主観的把握>の場合には、話し手は表現されている状況の一部になって、自らを視点の原点として表現している。話し手自身が状況の関与者の視点で状況を表現するのである。一人称の使い方の違いには、日本語と英語における話し手の状況把握の違い、つまり主観性の違いが反映されている。

3 二人称主語

一人称の代名詞と同様に、同じ状況を表現しても日本語では二人称を主語に用いないが、英語では二人称の代名詞の you を主語にして表現することがある。ここでも、日本語と英語の特徴が表れる。

二人称、つまり聞き手は you で表すわけであるが、話し手の声が届けば you と表現されるわけではない。ドアの向こうにいる人には、Who is it? と尋ねる。この段階では you ではない。電話で「どちら様ですか」Who is this? となる。ここでも you ではない。実質的な対話に入って、聞き手となり、you と表現される。声が届けば、you と表現されるのではなく、話し手と相対するようになって、you で表現されるようになるのである。

3.1 所有から存在へ

発話をとおして行う行動がある。感謝する、謝罪する、約束するといった行動である。聞き手に対して、話し手の気持ちなどを伝えることでこうした行動を遂行することができる。

(4) a. I thank you.

b. I apologize to you.

(4)では、話し手が主語で、聞き手が動詞または前置詞の目的語の文で、話し手

の聞き手に対する感謝、謝罪が行われる。日本語でも基本的には同様に、「感謝します」「謝罪します」と表すことができる。話し手が状況に関与しており、一人称、二人称が省略されて<主観的把握>に基づいた表現になる。

英語では、このように話し手による気持ちの表明ではなく、別の表現方法で同様の意味を表すことが可能である。

- (5) a. You have my thanks.
- b. You have my apologies.

you を主語にして、have を動詞に用いた文である。聞き手の所有を表すことで、話し手の感謝、謝罪の意味が表せる。他にも次のような例がある²⁾。

- (6) a. You have my gratitude.
- b. You have my respect.
- c. You have my deepest sympathies.
- d. You have my condolence on your son.

これらの例では、話し手の様々な感情が聞き手に伝えられる。話し手の聞き手に対する感謝、尊敬、同情、哀悼の感情が表現される。話し手の聞き手への気持ちも表すことができる。(7)では、話し手の愛情や支持の気持ちが表されている。

- (7) a. You have my heart.
- b. You have my love.
- c. You have my support.

次の例ではどうであろうか。

- (8) a. You have my attention.
- b. You have my word.

(8a)の例は、話し手が聞き手に対して、発話に注意を向けていることを伝えている。I'm listening と同じような意味になる。比喩的な表現になるが、You have my ear.も同様の意味になる。(8b)の word は約束の意味である。これらの例は、感情、気持ちを伝えるための表現ではなく、話し手の聞き手に対する何らかの行為を表す表現である。

(5)から(8)の表現においては、話し手は(4)のような状況への関与者になっていない。客観的に聞き手の所有について表している。聞き手にすれば自分の持ち物を相手に指摘されているようなものである。ただし、その所有物は形のないものである。すでに聞き手のもとにこれらが存在しているかどうかは、聞き手にも不明である。このように言われて初めて、話し手の気持ちなどが聞き手のもとに存在することが伝わるのである。したがって、聞き手が話し手の気持ちを所有するということは、話し手が伝えたことを含意することになる。

話し手の視点が主語にあるとすれば、ここでは、話し手の視点は you にある。客観的に you の所有を語ることで、話し手の行動の結果が表現される。この構文で表されるのは、感謝、謝罪などの言葉を介して遂行される行為である。日本語では話し手が遂行すると表現されるが、英語では遂行の結果が聞き手にあると表現することで遂行されたことを含意できる。

ここには、もう一つの日本語と英語の違いが関係している。池上(2006b)は、言語を<BE 言語>と<HAVE 言語>に分けている。日本語では、存在を表す動詞「ある」、「いる」が、所有を表す表現としても使われる。一方、英語は所有を表す have が、存在を表す意味に用いられる。池上(2006b)では、前者を<BE 言語>、後者を<HAVE 言語>と呼んでいる。(9)の表のような関係になる。

(5)から(8)の例を<HAVE 言語>の特徴に当てはめてみよう。英語の you have my ~ という表現には所有を表す have が含まれているが、you のところに、my ~ が存在するという意味になる。所有を表す動詞で存在を表すことができるという<HAVE 言語>の特徴である。一方、日本語にはこのような表現方法はみられない。(9)にあげたように、日本語では存在を意味する「ある」「いる」が所有を表す意味に使われるので、日本語は<BE 言語>ということになる。

(9)

表現 形式 表現 内容	<存在>	<所有>
<存在>	この部屋には窓が二つある ↓	This room has two windows. ↑
<所有>	私にはこともが二人いる	I have two children.
	<BE 言語>	<HAVE 言語>

(池上 2006b: 165)

<BE 言語>と<HAVE 言語>の違いは、状況把握の違いと関係していないのであろうか。<主観的把握>では話し手は状況の関与者なので、状況の中に存在する事物の方が主語が所有する事物よりも認識しやすいであろう。<客観的把握>では、状況を外から見るので、主語に話し手の視点が向かえば、主語が所有している事物の方が認識しやすいのではないだろうか。こう考えれば、<BE 言語>、<HAVE 言語>という分類は、状況把握と関連性がありそうである。

池上(2006a)では<主観的把握>に基づく文では文の原点が話し手にあるとされている。<客観的把握>に基づく文においてはどうかであろうか。主語を基準に文が組み立てられることを考えれば、話し手は主語に視点を置き、ここを原点として表現している。主語を基準に考えれば、主語が所有しているということは、存在することにつながるのである。一方、<主観的把握>の場合には、話し手は状況に関与している。存在についての発話では、主語が存在の場になる。話し手が存在の場に関わることで、存在が所有につながると言えよう。このように、<BE 言語>と<HAVE 言語>の違いは、状況把握と話し手の視点という観点から説明ができそうである。

日本語と英語における一人称、二人称を用いた表現の相違は話し手の状況把握の違いが反映されていると言えそうである。英語は<客観的把握>に基づく表現が、一方、日本語では<主観的把握>に基づく表現が通例である。この差が一人称と二人称を用いた表現の違いになっていると言えよう。

4 主語の省略

状況の把握の仕方の相違が、主語の扱いの違いになっていることはないであろうか。<主観的把握>が通例である日本語では、主語を表現しなくともよいが、<客観的把握>が通例の英語では、主語を表現することが通例である。本節では、主観性という観点からの一人称と二人称の主語の省略について探っていく。

4.1 主語と主観性の関係

日本語では主語が表現されないことが多い。特に、一人称の場合には、ほとんどの場合は表現されない。対話の場面で「チョコレートが好きです」と言えば、主語は一人称ということになる。「私はチョコレートが好きです」と言えば、「私は」の部分は対比的な響きを持つであろう。

主語を表現しないことは、池上(2006a)によれば、話し手の<主観的把握>の特徴である。なぜ主語を表現しなくてよくなるのであろうか。<主観的把握>においては、話し手が表現の対象となる状況の関与者になっている。状況の中が話し手の視点の原点になり、文が構成されていることになる。そうすると、聞き手は、話し手と状況の関係を把握できるのである。一方、<客観的把握>の場合は、話し手は状況を外からの視点で描写する。そのため、すでに指摘したように、主語が一人称の場合には話し手と主語の I が別人であるかのように表現される。話し手は状況に関与しないという立場から表現される。そうすると、主語の省略はできないということになる。

話し手が主語であれば、状況に関与することになるので、主語の省略が可能になると言えよう。主語が状況に関与していることが含意されれば、主語は省略できる可能性があることになろう。発話の状況によっては、英語でも主語が省略されることがある。この現象を見ながら、主観性との関係を考えていく。

4.2 主語が省略される場合

通例、英語では主語は省略されない。しかし、英語でも主語が略されることがないわけではない。会話や日記などの文章では主語の省略が行われることある。また、インターネット上での文のやり取りでも、主語の省略が多く見られる。省略した要素が聞き手によって復元可能であると話し手が判断した場合に

省略が起こると考えられる。接続詞による節の結合などのように、文法的要因による省略もあるが、ここではそのような省略は考察の対象とはしない³⁾。

4.3 命令文

英語では主語を用いるのが基本なので、主語が用いられなくなるのは、特別な意図がある場合である。例えば、話し手が聞き手に対して命令を表す場合には、主語が用いられない。命令は、(10a)のように述語動詞で文を始めることで表現されるが、(10b)のように命令の対象者である *you* と共に命令文が用いられることがある⁴⁾。

(10) a. Leave!

b. You leave!

(Langacker 2008: 470)

命令とは話し手から聞き手に対して行われる働きかけである。単に情報や意見を伝えているのではない。*You should leave.*のように、客観的に状況を表すのと、主語のない文で命令を表すのとでは話し手の姿勢は異なっている。主語を用いないことで、話し手は視点を聞き手に向け、聞き手が発話の原点となる。聞き手は発話の原点になったことを把握すると、命令として受け取ると考えられる。主語を用いないことと主観性が関係するとすれば、命令文は主観性の高い表現になる。話し手は命令文を発する側として、状況に関わっていると考えられる。これは主観性の高い場合の特徴である。主語を表示しないことで、話し手は状況への関与者となり、命令を聞き手に伝えていると考えられよう。命令文からも、主語を用いない表現と主観性の高さが関係していることがわかる。話し手は、主語を省略することで、命令以外の表現効果も実現できる。つまりは、主観性を高めることで命令以外の意図も伝えることができる。

4.4 二人称の主語の省略

二人称の主語が省略されるのは、多くの場合、疑問文の場合である。疑問文では、聞き手に対して問かけるといふ働きかけが行われる。助動詞や *be* 動詞といった疑問文を構成するのに必要とされる要素も一緒に省略される点では、

平叙文の主語の省略とは異なる。音調なども手助けになって、主語が省略されても疑問文であることは、聞き手にはわかる。対話の場面において、疑問文であれば主語が **you** であるということは推測できる。この場合、主語などを省略することで堅苦しさが減少する。

- (11) a. (Are you) Happy?
- b. (Are you) Afraid of him?
- c. (Are you) Hot?
- d. (Are you) In trouble?
- e. (Do you) Want some?
- f. (Are you) Looking for anybody?
- g. (Have you) Got any chocolate?
- h. (Have you) Ever seen one of these? (Quirk et. al 1985: 898)

主語を表示しないことで、主観性が高まり、話し手が状況に関与していることになる。話し手は聞き手に視点を向けて、聞き手とともに状況に関与するのである。ここでは、主観性を高めることが、堅苦しきの軽減につながっていると言えよう。

疑問文の形で、問いかけではなく、依頼や提案を表すことができるが、その場合にも同様のことが言えそうである。

- (12) a. Do you mind if I have a seat?
- b. Mind if I have a seat?
- (13) a. Do you need help?
- b. Need help? (藤原 2013: 64)

疑問文の形で依頼や提案を表す場合にも、主語などを省略することが、堅苦しきの減少に貢献する。話し手と聞き手が共に状況への関与者となることで、話し手の心理的な距離が短くなるためであろう。話し手は状況を客観的に外から眺めるのではなく、聞き手をとおして関与することで主観性を高めることがで

きる。そうすることで、話し手と聞き手が心理的に近くなり、堅苦しくない表現になると考えられる。

4.5 一人称の主語の省略

疑問文の場合には、音調などの他の要素の手助けが多いので、聞き手にとっては省略された主語などの推測は難しくはない。平叙文で主語が省略されると推測は難しそうであるが、省略されることがある。一人称の主語が省略されることが多い。次のような場合である。

(13) a. Beg your pardon.

b. Told you so.

c. Wonder what they're doing.

d. Hope he's there.

e. Don't know what to say.

f. Think I'll go now.

(Quirk et al. 1985: 896)

疑問文と同じように、主語だけでなく **be** 動詞も一緒に省略されることがある。

(14) a. Sorry I couldn't be there.

b. Afraid not.

(Quirk et al. 1985: 897)

(13a)、(13b)は特定の場面で慣用的に用いられる表現であるが、Quirk et al.(1985)は、一人称の主語の省略は、節を目的語にとれる動詞が述語動詞の場合に多いとしている。節を目的語にとる動詞は、主語が考えていることや認識していることを表す動詞が多い。こうした動詞の主語が省略された場合には、主語として話し手を想定するのが自然であろう。目的語で述べられる思考や認識の対象は主語にしかわからないので、話し手が主語であると考えられる。話し手は主語を省略することで、疑問文の場合と同様に、堅苦しさを低減を図る。主語を表現しないことが、主観性の高さの現れであるとするなら、ここでも主語を省略することで、話し手は、主観性高め、堅苦しさを減らしているのである。

Langacker(2008)では、異なる種類の述語動詞の文の例があげられている。

(15) a. I don't trust him.

b. Don't trust him.

(Langacker 2008: 478)

例えば、「その人を信用しているか」という質問に対して、(15)の二種類の返答が可能である。(b)は(a)よりも堅苦しくない。Langacker(2008)によれば、(15a)においては、話し手は聞き手とともに状況に関係せず、外から表現しているが、(15b)においては、話し手は状況の中から表現している。つまり、(15b)では、主観的に状況が把握されているのである。ここでも、堅苦しさが減少される。

疑問文だけでなく平叙文においても、主語を省略することで、話し手が状況に関与していることを表し、堅苦しさが軽減される。話し手は状況に関与することで、聞き手に心理的に近づき、堅苦しさを減らしていると言えよう。上であげた、会話や日記、インターネット上での文のやり取りなどの場合も堅苦しさを軽減につながると言えよう。主語の省略という主観的な状況把握の特徴は、英語においては特殊な効果をもたらす場合に見られることになる。

5 おわりに

池上(2006a)の<主観的把握>と<客観的把握>という考え方をもとにして英語の I と you の用法について考察を加えてきた。英語では日本語とは異なる状況把握に基づいて発話が構成されることがあることを示した。主観性に加えて、話し手の視点と話し手の聞き手への働きかけという見方を加えることで、英語の一人称、二人称の主語の省略という現象も説明できることを示した。主観性は言語運用の分析に有効な考え方であると言える。

外国語として英語の学習を始めると初期段階で I と you に出会うことになる。しかしながら、日本語を母語にする者にとっては、これらの使用に困難を感じることもありそうである。それは、言語表現のもとになる状況の把握の方法が英語話者と日本語話者で異なることがあることに由来していると思われる。英語では一人称が主語の場合であっても状況の<客観的把握>に基づく表現を行うことがあるが、日本語では通常このような表現方法はとらない。そのため、

日本語話者がこのような表現に出会うと戸惑いを感じるであろう。また、日本語では「星が見える」「風の音が聞こえる」のように主語が明示されない表現が多用される。一人称の主語が状況の一部となったかのような表現になる。こうした表現を英語に訳そうとする場合にも戸惑いを感じるであろう。基本的には主語、目的語を表現する英語と、必要に応じて主語や目的語を表現する日本語という違いは意外に大きな違いであると思われる。

外国語として英語を学習するにあたってはこのような点を留意することが必要であろう。頻繁に用いられる人称代名詞の用法の一部なので、理解が望まれる部分であろう。

注

- 1) 池上(2006a)はこれをゼロ化と呼んでいる。
- 2) (6)(7)(8)の例は COCA による。COCA で最も頻繁に使われていたのは、word を使った表現である。
- 3) 話し言葉における省略については、澤田(2016)に詳しい。
- 4) 命令文をこのように考えると、you をつけた方が厳しい命令になるのは、主語を省略した方が堅苦しさを軽減させることと関係しているかもしれない。

参考文献

- 藤原正道. 2013. 「人称代名詞と英語と日本語の丁寧表現の分析」 実践女子短期大学紀要 第 34 号, 59-68.
- Heine, L. 2011. "Non-coordination-based Ellipsis from a Construction Grammar Perspective: The case of the Coffee Construction." *Cognitive Linguistics*, 22-1, 55-80.
- 池上嘉彦. 2006a. 「〈主観的把握〉とは何か—日本語話者における〈好まれる言い回し〉—」 『月刊言語』 35, 20-27.
- . 2006b. 『英語の感覚・日本語の感覚』 東京: 日本放送出版協会.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Nariyama S. 2006. "Pragmatic Information Extraction from Subject Ellipsis in

Informal English." Proceedings of the 3rd Workshop on Scalable Natural Language Understanding, 1-8.

Quirk, R, S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. A Comprehensive Grammar of the English Language, London: Longman.

澤田茂保. 2016. 『言葉の実際 1—話し言葉の構造』 東京: 研究社.

参考データベース

Corpus of Contemporary American English: <http://www.americancorpus.org/>